

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

巫女ねと日和

小説 筆祭競介

挿絵 ひなたもも

序章	夏の神社の境内で……	006
第一章	黒猫淫魔と対決日和	017
第二章	猫耳たちにごぶっかけ日和	053
第三章	初恋の人と初めて日和	079
第四章	妹的巫女少女とウブウブ日和	119
第五章	幼馴染みとニャンニャン日和	157
第六章	お稲荷様とハーレム日和	195
終章	夜の神社の屋根上で……	248

登場人物紹介

Characters



ひさめぎき ひなこ 氷雨崎 緋奈子

氷雨崎神社の跡取り娘。将来は一人前の巫女になって、家計を助けるという夢を持つ。責任感が強く、強情でなかなか素直にならない性格。

ふじみや しずる 藤宮 静瑠

名門・藤宮神社の神主代行。現在は未亡人。おっとりした性格で、誰からも慕われる優しき女性。

ふじみや 藤宮 このみ

静瑠の娘。巫女見習いとして修行に励む少女。見た目は幼いが、母親思いのしっかり屋さん。

チトセ

突如現れた謎のセクシー美女。正体は、氷雨崎神社に祀られたお稲荷様。

かみなざりようた 神薙 諒太

今作品の主人公。まだ学生の身ながら、類まれな霊能力を持つ優秀な狩魔士。

「……くつ、で、でも」

もともと生真面目な性格の少女である。実家神社のご本尊様に、真つ当な理由で諭されては、無茶な反論はできないようだ。

「大切な免状のこともあるしの。こやつを精を浴びるか、巫女でいられなくなるか、好きなほうを選ぶがよい」

やはりこれがトドメだった。彼女にとって『巫女』でいることよりも優先されることなど存在しない。たとえ『だいきらい』な男の精液を浴びなければならなくとも。

「わかったならば、一列に並べ」

栗毛の巫女が顔を真つ赤にして立ち上がりオズオズと未亡人の隣に膝をついた。諒太の前に左から、緋奈子、静瑠、このみの順で猫耳を生やした三人が並ぶ。

「よし。準備は整ったの。それではコヤツがせつかく放つてくれる貴重な精じゃ。一滴でもおろそかにせぬようにじゃの——」

チトセが続けた指示内容に三人が更に顔を赤らめた。このみの顔は完熟トマトのような赤さにまで達し、緋奈子に至ってはやはりその場から立ち上がろうとする。

「みんなでチトセさんと諒太クンにコレを直してもらいましょう」

そんな少女たちの肩を、中心に座る静瑠が優しく抱き締めニコッと微笑んだ。注射を前にしてグズる子供を安心させるような、慈愛の籠もった表情である。それを見てこのみは

素直にコックリと頷き、緋奈子も拗ねた自分を恥じるように下唇をキュッと噛んで、全てに同意するように顔を上向けた。覚悟の決まった三人を見て、チトセの視線が諒太に戻る。「色んな意味で待たせたの。それではあとはお主が精を放つだけじゃ。しかしなるべく牡の昂りが最高潮のときに放つたほうが効果的じゃでの。限界まで我慢するんじゃぞ」

金髪の美女はそれだけ言うのと、諒太の正面から背後に移動した。そして今まで狐耳があった所に、六つの猫耳がずらりと並ぶ。

にチュくゆニユるくちゅッ。

後ろに回ったお稲荷様は、右手だけを腰から前に回して少年のペニスを抜き続けている。そのため、彼女の指が根元まで引かれると肉棒は左を向き、先端付近まで伸びると右を向く。並んだ三人の鼻先でペニスの先端がユラユラと左右に揺れていた。

「さて、それでは最後の仕上げにかかるとするかの」

そんな声が後ろから聞こえた直後だった。

「限界まで我慢って言われても……も、もう、俺っ一杯一杯で——っふああっ！」

諒太は鋭い喘ぎ声を吐き出した。身体の真後ろから、背筋を駆け抜け脳天まで突き抜けていった快感に、雷でも落ちたように大きく仰け反っている。

ぺおれろくちゅレおれろれろっ！

臀部の中心で、熱くぬめる肉片が激しく踊っていた。

——ケ、ケツ!? チトセが俺のケツの穴を舐めてるの!?

肉体的快感もさることながら、彼女ほどの美女にそんな不浄な箇所を舐められているという現実が、少年の意識を淫靡に痺れさせた。

「はくああつ! お、おれ、おれこんなのつあああつあああつあああつ!」

力の込められた舌尖が窪みに嵌まると、そのままアナルの入り口を弾くように舐めていく。大きく喘がずにはいられない強烈な肉悦が身体の真後ろから迸る。

「んんんっ……どうじゃ、意識が蕩けるほど気持ちよいじゃろう。んんんっ、それともっ……んはああんっ——もつとこういうほうが好みかの」

尻の谷間をなぞるように、激しくレロレロと上下していた牝舌がその動きを止めた。直後、僅かに尖った舌尖を、きつく窄まった皺穴に合わせる。

ぬぐっ……レロくちゅぬぐるルっどるるルっ!

それはもう舐めるといふ行為ではない。固く窄まった肛門内にチトセの舌が強引に振り込んでくる。異物が無理矢理、中に侵入しようとしてくる過激な責めに、顎が真上を向くほど大きく仰け反った。まるで女の子のような喘ぎ声を迸らせながら、女の子がエッチをするときはこんな気持ちなのかもしれないと刹那的に考える。

もういつイッてもおかしくない。ピチャピチャと絶え間なく聞こえてくる湿った音とリンクして、未知の快感が全身の細胞を愉悦に震わせた。

——こ、こんなの反則だ！ チ、チトセの舌がっ、す、すごっ、凄すぎる！

多分、人間ではありえない長さまで伸びている。そして堅く窄まった小穴を、僅かに先の尖った牝舌が錐揉み状態でビチビチと深く貫いていた。ドリル舐めと言うべきか、スクリュー舐めと言うべきか。お稲荷様の牝舌によってアナルを内側から舐められている。

「レロっへああっ……こんらにっ……びちよむちゅっ、ケツをヒクつかせおってへえっ」

快感神経を直接刺激されているような壮絶な肉悦が全身を駆け巡っている。喘ぎ声が掠れるほど喘ぎ、全身からは愉悦の汗が滝のように噴出していた。両膝がガクガクと官能に震えだし、ワイルドな美貌が深く埋められている臀部は、尻エクボをビクビクと引き攣らせっぱなしである。

「……す、すごすぎるわ」

「お、お兄ちゃん……だ、大丈夫なんですか？」

「諒太くん……とつても気持ちよさそう」

こんな艶事を初めて目にするであろう緋奈子とこのみだけではなく、未亡人の静留ですら少年の激しすぎる身悶えっぷりに圧倒されているようだ。

——皆が見てるっ。俺のっ……こんな情けない姿をっ！

お尻の穴を舐められながらペニスをギンギンにおったてて、女の子のように喘いでいるのだ。特別親しい三人の女性に、こんな恥ずかしい姿を見られ精神までも追い詰められる。

ぐちゅくちゅくちゅルックちゅシユるるっ!

ペニスを扱くチトセの右手にも、手首に捻りが加えられた。五本の白い指たちが青筋の立つ肉棒全体を巻き込むように扱いていく。肛門を抉る舌の動きは過激さを極め、舌先が届く最深部から入り口の小皺に至るまで、とぐろを巻くようにして舐め尽くしている。前後の排泄器官を螺旋状の快感に責め抜かれ、もう本当に限界だった。トドメとばかりに、人差し指の腹を使って亀頭の小穴までもコスコスと擦られはじめた。

「くああっつも、もうイクっ! もう、ああああっイッちまううっ!」

諒太が絶叫した直後。それまで目の前に並んでいた三人が、先ほどチトセに言われた指示を実行する。

『んはああああっ』

静瑠が、このみが、そして緋奈子が、三人同時に口を開け大きく舌を突き出した。三つの美貌が淫猥に歪み、三枚の美しい味覚器官が横に並ぶ。

「っ!? ……あああっあああああああああっ!」

彼女たちほどの美女、美少女たちが、喉ちんこが見えそうなほど大きく口を開け、諒太の精液を一滴残らず受けるための顔をつくっていた。まるで餌を待つ雛鳥のような表情で、ペニスから吐き出される肉汁を待っている。あまりにエロティックなその光景が最後のトリガーを引き絞る。それに合わせてチトセの舌が淫らにくねり、指が一際大きくペニスを



扱いた。肉先が左から右へと大きく振れ——限界まで我慢していた灼熱の激流が、細い尿道の中を一気に駆け抜けていく。

ドブツゆドリユツんっ！

先端の小穴から弾け飛んだ粘塊が、左から右へ白い糸を引きながら放射状に飛び散った。「熱っ！」「あんっ」「ふあっ!？」

緋奈子の舌、静瑠の鼻先、このみの頬という順に三つの美貌を一撃で汚す。

ドグりゆどびゆどぶドリゆどぶプっ！

肉先からは更に白濁の粘液が吐き出され、三人の美貌に直撃し続けた。女性の命とも言ふべき顔を、己の排泄液でドロドロに汚していく。その間もお稲荷様の牝舌は肛門を深く抉り続け、右手はペニスを巧みに扱き続けている。

「っ……くっ……っはああっ……」

最後の一滴まで絞り出すと、チトセの舌がぬると肛門から抜かれた。肉棒を掴んで放さなかつた指も離れる。身体のコで暴れまわっていた肉悦の嵐から解放され、息んでいた全身から力が抜けた。盛大な射精で疲れた身体を支えるためにガックリと両膝に手をつく。そのままハアハアと肩で息をしながら、目の前に並ぶ三人を見下ろした。

「う、うわあ……」

このみのあどけない頬の上にはヨーグルトのように濃厚な粘塊がたっぷり盛り上がっ

ていた。それは横に長く伸びて隣に座る母親の頬まで繋がっている。一番濃度の高い初弾を受けた緋奈子の舌は、諒太の精液と彼女の唾液でぬらぬらに濡れ光り壮絶な淫靡さを醸し出していた。彼女の仕草の象徴ともいえるべき、いつもツンと逸らす尖った顎からは、白濁の肉汁が糸を引きながらトロトロと滴っている。

今盛大に射精をしたばかりだというのに、その光景を見ているだけで、なんだかムラムラしてきてしまう。と、そんなとき「あっ」と思わず声が漏れた。彼女たちの頭の上に乗っている猫耳が、ぼんやりとだが紫色に輝きだしたからだ。

「ふむ。やほりの」

今まで諒太の後ろに跪いていたお稲荷様が隣に立って、その様子をジッと見ている。

と、同時に少年が吐き出した精液が、まるで雪が蒸発するようにシユワシユワと消えていく。顔を汚された三人は、お互いの顔を見て目を丸くしていた。

「どうじゃ。身体の調子は？」

「チトセに尋ねられ、三人が再度お互いの顔を見合わせる。既に彼女たちの顔からは完全に精液が消えていた。

「さっきまでの、身体の内側が熱い感じはなくなりました」

「変な疼きも消えたみたいねえ」

「……感覚だけなら、前と変わらない感じですよ」

「……し、しようがないよ。だって緋奈子ちゃんが……可愛すぎるから」

素直に思ったままを口にする。少女の頬がポムツと湯気が出るほど真っ赤に染まった。

「バ、バカ……」

緋奈子が真っ赤な顔のままこちらをキツく睨んでくる。しかし後ろに見える長い尻尾は、嬉しそうに揺れていた。

——バカって言うのは、て、照れ隠しなんだよな……、そ、そうだよな……。

今まで散々、本気でバカバカと言われてきているだけに、パタパタ振られている尻尾を見ても自信が持てない諒太である。しかしここまできて初体験のときのように、グズグズしているわけにもいかない。

「ふ、服……あの……ぬ、脱がすよ？」

キスに続き積極的な行動に出てみる。緋奈子は一瞬だけ躊躇するような表情を浮かべてから、恥ずかしそうにコックリと頷いた。

——こ、こんなに素直な緋奈子ちゃんが見られるなんて……。

今までキツくあたられ続けていただけに、信じ難いリアクションである。諒太は一つ深呼吸をしてから、巫女服を前から開くように脱がせはじめた。健康的な肩が剥き出しになり、細い鎖骨が露わになる。その下には白いサラシが巻かれていた。

「……本殿で祈祷をするから……下着も着替えたの」

恥ずかしそうに口の中をモゴモゴさせながら呟くセリフを、純白の布地を形よく盛り上げている胸を見つめながら聞いていた。何より早くこの中が見たい。サラシの結び目に手を伸ばしてもなお、巫女少女は抵抗してこなかった。

——うわわわっ、と、とうとう緋奈子ちゃんのおっぱいを……。

諒太の脳裏に幼馴染みとの思い出が洪水のようにフラッシュバックする。

かつてまだ二人が幼かった頃、お互いにパンツ一枚で水浴びをしていた頃がある。当然、上半身は丸裸で薄い胸は丸出した。それを緋奈子が突然嫌がりだした。べったんこの胸を手で隠すのだ。まだ自分が性というものを意識していない時期で、そんな相手の行動に違和感を感じたものだった。

「！」

そうだ。今、思い出した。そのとき初めて女の人の胸が、男の自分とは違う『おっぱい』であることをぼんやりとだが自覚したのだ。それから静瑠の巨乳を意識するようになって、彼女のことを『静瑠ママ』ではなく『静瑠さん』と呼ぶようになった。今までずっと自分の性の目覚めは静瑠だと思っていたが、そのそもそもそのきっかけを与えたのは緋奈子の『おっぱい』だったのだ。

自分の性の原点を思い出しているうちに、両手はサラシの固い結び目を解き終わっていた。サラサラと白布が床に落ちていき、その下にある白い胸が露わになる。

——あのぺったんこだった胸が……こんなにキレイに育ったんだ……。

十年以上前に自分を『男』にした胸は、ちゃんと『女』に成長していた。サラシに負けないほど白い乳肌、丁度諒太の掌に収まるぐらいの大きさに膨らみ、頂点に桜色の突起をのせている。静溜ほど巨乳ではなく、このみほど未成熟でもない。白磁のような肌の美しさや乳首の淡い色彩などは成人前の幼さを残し、決して小さくない膨らみからは艶かしい色気も漂っている。若さと成熟が絶妙に拮抗している、この年代の少女でしか持ちえない乳房だった。

「そ、そんなにジッと見ちゃ……ダメっ」

顔を真っ赤にした猫耳少女が、両手で胸を隠そうとする。

「ち、ちちち、ちよっと！」

慌てて相手の手首を掴んだ。緋奈子はギュッと下唇を噛んで睨んできたが、すぐに観念したように目蓋を閉じて腕からも力を抜いた。諒太はホッと安堵の溜め息をつく。ここまできてオアズケを喰らわされては堪らない。

「さ、触って……いい……かな？」

相手のご機嫌を窺うように上目遣いで片想い相手に尋ねる。

「そ、そんなこと……女の子にいちいち聞くんじゃないの」

栗毛の幼馴染みは真っ赤な顔をして、いつものようにツンと顎を逸らして横を向いた。

——え、えーと。つまり好きにしていって意味だよな……うわわっ、緋奈子ちゃん！
ドキドキと胸を高鳴らせながら、若々しい膨らみに片手を伸ばした。
むにゅんっ。むにゅにゅ。

指先に力を込めて揉み心地を確かめると、緋奈子が「あん」と小さく喘ぐ。

——うわあ、なにこれ……スゲー弾力……。指がとまんねえ。

乳肌がパンパンに張りつめて、その中に柔らかな牝肉がギュウギュウに詰まっている。指先に力を込めれば込めただけ、乳肉が反発してくるような感触だ。それでいて柔らかい。牝の本能を強く刺激し、いつまでも挿んでいたいと思わせる極上の弾力だった。

「こ、こっちも……ぬ、ぬぬぬ脱が、すよ」

左手でバストを揉み続けながら、両膝を床につき右手を赤袴に向かわせた。いちいち聞くなど言われても、今までの精神的立場上、相手にお伺いを立てずにはいられない諒太である。そんな少年に対し、猫耳少女は顔を赤らめたまま『好きにすれば』というような横顔を見せた。しかし腰帯を解こうとすると、相手はハッとした表情をしてこちらの手首を掴んでくる。上目遣いで見上げると緋奈子は顔を耳まで真っ赤にしてやはりそっぽを向いた。「……あ、あの……き、祈祷をするために……着替えたんだからね」

緋奈子はサラシのときと同じセリフを呟くとオズオズと手を離れた。左手でバストを揉み続けながら、右手だけで帯を解いていく。赤袴がサラリと床に落ちた。目の前に現れた

光景に目と口が丸くなり、ワニワニと動き続けていた左の指の動きも止まる。

——ふ、ふんどし!?

ブラジャーをサラシにしたのなら、下は必然的にこうなるということか。

緋奈子のフンドシ姿である。足先には白足袋である。胸は丸見えてオマケに猫耳尻尾付きだ。

「……こ、こんなの……反則だ」

これで興奮しないわけがない。サラシのときとは違いいきなり脱がそうとは思わなかった。鼻息荒く幼馴染みの片足を掴むと、太腿を強引に自分の肩に乗せた。フンドシの横から指を突っ込み股間を覆う布地を弛める。今までのようにお伺いを立てなかつたのは、興奮しすぎてケダモノ状態になってしまったからである。

——こ、これが……緋奈子ちゃんのアソコ!

フサツと生えた毛並みのよい茂みの下に、適度に厚みのある大陰唇が続いていた。僅かに開いた割れ目からは、濃いピンク色の膣壁が覗き可憐な牝華を咲かせはじめている。女体と同様、まだ熟しきつてはいないが、蕾でもない段階まで発育していた。

「あっ……だ、だめえっ……くふんっ!」

舌を大きく突き出して僅かに開いた牝溝を一舐めする。肩に乗せている太腿がビクンと痙攣し緋奈子が鋭い喘ぎ声を上げた。諒太の鼻息はますます荒くなり、幼馴染みの入り口

をガムシヤラに舐めまわす。

「はあんっ……っ、そんなところ……き、汚いわよおっ……」

「はむっンはむはああっ……そ、そんなことないよっ……ンふんんんんんっ」

「バ、バカあつ！へ、へんな所で深呼吸するんじゃないわよっ！」

祈禱前にしつかりと水垢離みずごりでもしたのだろう。一杯に息を吸い込んで、ミルクを薄く溶かしたような彼女の甘い香りがするだけだった。

レろんっ、れるレろっぬるるるルっ。ペろムチュれろろっぬるるルっ。

牝裂から覗くピンク色の花卉たちを一枚一枚執拗に舐めしゃぶっていく。細く入り組んだ襞の隙間に舌を這わせ、唇を使つて強く吸い上げる。

「っ……くはあんっ、っはふあっ！ソコはあっひいっ！っひゃあっふあああっ！」

僅かな舌の動きに合わせて猫耳巫女は鋭く喘ぎ、片足だけの不安定な姿勢で身悶える。舌責めから逃れるためか、白足袋に包まれた足の甲を一杯に反らし完全に爪先立ちになっていた。ふくらはぎがグッと盛り上がり、フルフルと震える姿がとても艶かしい。

——す、すげえっ、緋奈子ちゃんが俺にペロペロされて、こんなに感じてる！

肩に乗せている太腿の痙攣具合も半端ではない。興奮した舌先はその割れ目の底にある窪み——膺の入り口を捉えてピチャピチャとほじりはじめた。

「ひ、ひなこひゃんのここ——レロペちゅレロンっ……とろとろひてひたひよおっ」

舌先に熱いぬるみを感じた。爽やかな酸味を帯びたその味が、気の強い緋奈子そのものの味に思えて、鼻息がますます荒くなる。より舐めやすくするために弛みきつたフンドシを剥ぎ取って、更に激しく舌先を躍らせた。

「あああつ！ らめつ、あつ、りようたつ、なかまで舐めちゃだめえつだめええつ！」
片足立っていた膝がガクガクと震えだし、巫女少女が大きくバランスを崩した。

諒太は素早く身体を動かし、床に崩れ落ちそうになった緋奈子を抱きとめる。視線が合うと彼女は恥ずかしそうに顔を背けたが、腕の中から逃げだそうとはしなかった。赤く染まった横顔があまりに可愛くて、思わずその頬にチュッとキスをしてしまう。

「……バカ」

緋奈子の頬はますます赤くなり、尻尾がピコピコと可愛らしく揺れ続ける。片想い相手のこんな姿を見せられて、ペニスは作務衣を突き破りそうなほど熱く充血していた。一刻も早くこの全身に渦巻いている欲情を、腕の中にいる幼馴染みにぶちまけたい。

緋奈子ちゃん、と一声叫び彼女を床に組み伏せようとしてハツとした。

——い、いかん。……いかん、いかん。ガツついてはいかん。

処女のこのみにいきなりブチ込もうとしたときの醜態が脳裏をよぎる。同じ失敗を繰り返さないために一つ深呼吸をした。そして均整の取れた美しい女体を優しく床の上に横たわらせる。すると緋奈子が不自然に身体を捻った。



厳しい修行で鍛えられた胸板が、巫女少女のあどけない舌に舐められる。胸の小さな突起から、ピリピリと肉悦のパルスが全身に向けて迸った。淫魔に取り憑かれているためか、こんな所までいつも以上に敏感になっているようだ。

「もう、そんなだらしな顔しちゃって」

緋奈子だった。横に両膝をつくくと、真上からこちらを覗き込んでくる。

「……あ、あんたが私たちのせいで妖魔になっちゃったら寝覚めが悪いから……だから、こうしてるんだからね。か、勘違いするんじゃないわよ」

周りの目を気にしてか、あれほど情熱的なアナル舐め奉仕をしてくれた後だというのに、まだこんなことを言ってくる。しかし態度は全く逆だった。切れ長の瞳はとろんと甘く潤んでいるし、後ろの尻尾は相変わらず嬉しそうにパタパタ振られている。

「ひ、緋奈子ちゃん——つつんぐ……っんんんっ」

いきなり唇を重ねられた。そして緋奈子のほうから舌を口内に踊り込ませてくる。言葉以外は口も奉仕に積極的だった。諒太もすぐにそれに応じる。舌を絡め、時には唇でねぶり合い、お互いの唾液を混ぜ合うように口腔粘膜を貪り合う。

グラマーで妖艶な金髪美女の名器でセックスしながら、居候先の美人母娘に唇と舌で愛撫され、片想いの相手とは舌が蕩けるような濃厚ディープキス。この夢のようなシチュエーションに興奮し、理性がどこかに吹き飛んでしまいそうだ。

「くちゅれろれろっ……ッ……っはあっ——お、おにいちやあんっ……むちゅくちゅっ」
「はあああんっ……なんだかとても切ないわあっ——っれろんんっ」

「り、りようらあ——んんっアソコに諒太のが……んんっ、ジンジンしてるのおおっ」

性交していない三人もチトセと感覚がリンクしているために、奉仕をしながらどんどんと息が上がっていく。彼女たちの身体が官能的にびくんびくんと痙攣している光景もかなり刺激的だ。諒太はすぐに果てないためにギュッと両目をつぶった。

「くふううっ……いい頃合じゃの——更に皆の気を練り上げ高めるぞ」

チトセのそんなセリフが聞こえた直後——パッ！

諒太の腰にかかる女体の重さが激変した。密着していた尻や太腿の感触も全く別モノになっている。何より変化したのは結合している女性器の感触だ。無数の舌が蠢いているようなミミズ千匹構造だった膣が、突然ガチッと握り締めるように肉棒を圧迫してきた。

驚いて目を開けると——更に驚いた。

「ふあっ!? なっ、なんで、お兄ちゃんと、こんな……」

今までチトセが乗っていた腰の上に、このみが目を丸くして乗っていた。騎乗位の体位である。金髪美女と根元まで繋がっていた剛直を、和風美少女に挿し変えた感覚など全くない。文字通り、一瞬でチトセとこのみの身体が入れ替わったのだ。

「うふふふっ。いま妾たちは一心同体じゃでの。このようなことも自由自在なのじゃ」

お稲荷様が、つい先ほどまで愛弟子の舐めていた諒太の胸に舌を這わせながら甘く囁く。「はあんっ、す、凄く……感じちゃうです……これ、す、凄いつ……はあああんっ！」

中のペニスを蜜壺でじっくり捏ねるようだった牝狐の動きから一変して、小柄な少女はクイクイと柳腰を前後に揺るように動かしてくる。まるでヘソの裏側に龟头を擦りつけるような大胆な腰使いだ。前回、この体位で初経験を済ませているだけに少女の動きは滑らかでとても大人びていた。

「ああん。とつてもエッチな腰つきよ。このみも女になったのねえ」

母親が感慨深そうに甘い溜め息をつくとき、少年の胸から二人の結合部に回った。

「ひゃんっ！ お、お母さん、そ、そこ、だめですっ、弱いですうっ！」

「くわあああつ！ た、たまんねえっ、し、静溜さんの、し、舌、したがあつ！」

藤宮神社の女当主が一人娘の華芯と、それを貫く居候の剛直から皺袋までを一緒くたに舐めまわしはじめた。肉棒を蜜壺に強く締め付けられながら、陰囊をその母親に舐めしゃぶられる愉悦に奥歯をグッと噛み締める。股間で炸裂している快感もさることながら、シチュエーションの淫靡さに理性がジワジワと蝕まれていく。

「ふあああつ、お、おにいちちゃんっ……こ、このみはあ……あああつ、このみわあああつ！」

感覚がリンクしていても、実際に身体を繋げるほうがやはり官能も強烈なのだろう。牝肉と牝肉が深く交わり、グチュグジュと擦れ合わず快感はやはり格別だ。このみは身体を

前に倒すと諒太の脇横に両手をつけて、前後させていた腰を今度は上下に動かしはじめた。——このみちゃんのちっちゃなおっぱいが、あんなにピンピンになってる。

目の前で淡いピンク色の乳首が淫らに揺れていた。思わず右手を伸ばしてその幼い胸を掴む。膨らみなどほとんどないのにプニツとした感触が掌を押し返した。妹分の少女は可愛らしく「あん」と喘ぎ、細い腰をますます淫らに躍らせる。

「くはあつ……だ、だめだよ、このみちゃん。そんなにエッチに激しくされちゃうと！」
「だ、だって、こ、腰が止まらないですう。っ——はあんっ……はくああああんっ！」
巫女少女のただでさえキツキツの膺壁が、激しい交わりの影響のためか更にきつく引き絞られる。たっぷりの愛液でぬるぬるになりながら激しくペニスを扱いてくる。

「いきなり精を漏らすでないぞ。うふふふっ、まだ始まったばかりじゃでの——ほれ」

自分の唾液でぬるぬるにした少年の乳首を、チトセが指先でピンと弾いた。その直後、またもや腰に乗る女体の感触が激変する。握り締めていたほとんど厚みのない胸の感触が、突然、ぶにゅんつと重量感たっぷりに変化した。肉棒を襲っていたキツすぎる締め付けも程よく弛む。酸味の強い青い果実に無理矢理ねじ込んでいるような感触だったのが、果汁がポタポタと滴る完熟フルーツにねっとり包まれているような変わりっぶりである。

——わわわっ、こ、今度は相手が静溜さんになってる！

育ての母のグラマーな女体が、己の腰に乗っていた。優しく全身を抱き締められている

よくなセックスの心地よさに、諒太はふあああ、と甘い吐息を漏らす。

「あん、諒太クンの……この恰好だと奥にズンズンあたっちゃって……はあああんっ」

初体験で彼女に何度も中出ししたときは、毎回自分が上になる体位だった。騎乗位での結合は、静瑠とはこれが初めてである。育ての母は慈愛の籠もった優しい瞳でこちらを見つめながら、ゆっくりと身体を動かしてはじめてた。

——これって俗にいう……親子どんぶりってヤツだよな。

娘とセックスしていた直後に、今度は母親とセックスしている。しかも性器の抜き差しによる物理的なノスはゼロ。背徳感満点のシチュエーションに嫌でも鼻息が荒くなる。

「お、お兄ちゃんの遅いのが、お母さんの中に丸ごと埋まっちゃってるですう」

すっごくエッチですう、とこのみの声が股間から聞こえてきたと思つたら、先ほどまでの母親と同じように男女の結合部分をペロペロと舐めはじめた。こんなに気持ちいい思いをしていいのだろうか。至れり尽せりな母娘どんぶりセックスに溺れきる。右手できつく静瑠の巨乳を握り締めている以外は、完全にマグロ状態だ。

「りょうたあ……も、もつとっ、あはんっ……さっきみたいに舌をからめあおうよお」

動きの止まってしまった少年の唇を、栗毛の幼馴染みが甘えるようにペロペロと舐めてきた。びっくりする。こんなにはつきりしたセリフで彼女が自分を求めてくるとは思わなかった。緋奈子もすぐに己の発言にハツとして、慌てて視線を逸らしている。顔を赤らめ

ながら恥ずかしそうにしている姿が可愛くって仕方がない。

「あ、あの……今のは……そ、そういう意味じゃなくって……きゃんっ!?」

諒太は右手で静溜のバストを鷲掴んだまま、左手で緋奈子の顔を引き寄せた。顔を上げて幼馴染みの唇にむしゃぶりつく。その瞬間までは戸惑った表情をしておきながら、彼女のほうからすぐに舌を入れてきた。

「れるんちゅんっ……ひ、ひなこちゃんっ……も、もつとレロレロっん——んんっ!?」

また右手で掴んでいる乳房の大きさが変わり、ペニスを包む蜜壺の感触が変化した。今度の相手は緋奈子である。身体を倒すような姿勢でキスをしたまま繋がっていた。彼女はバックで抱いたただけなので、顔を合わせる形でセックスするのは初めてだ。

「ああんっ……こ、これっ……さ、さつきと当たる場所が違って……きゃふううんっ」

腰をクイクイッと不器用に振りながら、栗毛のツイントールが淫らに揺れる。切れ長の瞳は官能で潤み、気の強い美貌が艶やかに弛んでいた。

「緋奈子ちゃんて、っはあっ……エッチしてるとき、くううっ……そんな顔するんだ」

「な、何言いだすのよ……って……あ、あの……私どんな顔してるの?」

「スゲー気持ちよさそうな顔」

「……バ、バカ」

顔を真っ赤にさせながらも腰の動きを止めようとはしない。先ほどの失言といい、自ら

騎乗位で動く健気さといい、緋奈子の強気すぎる外面が官能に蕩け、可愛い女の子としての本性が見え隠れしはじめている。

そんな片想い相手の艶姿に牡の本能を刺激され、下から女体を突き上げた。紅白のリボンが激しく踊り、形のよいバストがぷりんぷりと若々しく弾む。薄い腹筋は突発的にビクビクと痙攣し、握り締めている乳房の頂点はガチガチに硬直していた。

「ああっ緋奈子ちゃんっ、も、もう少し、……くはあっ、っ……ゆ、ゆっくり動いてっ」
「そ、それはこっちのセリフよ。っあんっ、りようたがズンズンしてくるからっ、くはああんっ、身体が勝手に動いちゃってっ……ああああっ！」

「うわっ！ そんなにいきなり締め付けられたら俺っ、我慢できないよおっ！」

二人はまるで一匹の淫獣のように、腰の動きをピッタリと合わせて性の快感を貪り続けた。それがあまりに激しく濃密な交わりのため、牡牝の結合部分では攪拌された愛液が白い泡のようになってトロトロと垂れ流れはじめていた。

「れるおんっ——んはあっ……すぐくエッチな味で、頭がクラクラしてきちゃうわねえ」
「ぺろくちゅっ……お母さんの舌ともっ……こんなに絡み合っちゃって……んはああっ」

しかも二人の結合部分には藤宮親子がその美貌を寄せている。ペロンペロンと二枚の舌が絡み合うようにしてそれを舐め取っていく。

「くああっ、二人の舌までチンポに絡みついてきて、っああっ、もうおれえええっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>